

はしがき

本書は、近現代の政治思想家たちが何を「不正」としてとらえたかのか、そしてそれにどう対応しようとしたかに光を当てることを目的として編まれたものである。タイトルに「逆光」という語を用いたのも、「ポジ」というよりも「ネガ」に照らしたときに、思想家たちは何を受け入れることのできない事柄とみなしたのが、よりくっきりとした輪郭を結ぶのではないかと考えたからである。

本書が取り上げている主な思想家は、J・ロック、I・カント、J・ベンサム、A・トクヴィル、K・マルクス、A・グラムシ、M・ホルクハイマー、T・アドルノ、H・アーレント、J・シュクラール、丸山眞男、J・ロールズ、J・ハーバーマス、I・M・ヤングらであり、ごく選択的である。したがって、近現代の時代にあって、思想家たちが受け入れがたいとみなした事柄に万遍なく光を当てているわけではない。

とはいえ、本書の議論を通じて、宗教的な迫害、植民地主義の欺瞞と暴力、統治権力の濫用、人々を無力化する専制、資本主義のもとでの搾取、自然的劣性という表象、人種主義、ホロコースト、性差別、本人に帰責できない自然的・社会的偶然性が導く不利、個人を見舞う不運、そして制度や構造を通じた支配・抑圧といった数々のことがらが、思想家たちによってなぜ不正としてとらえられ、主題化されていったのかを理解することができるのではないと思う。

いま挙げた事象の多くは、今日の私たちの眼から見れば、不正や悪であるのは明白と思われるかもしれないが、同時代においては必ずしもそうではなかった。というよりも、それらはむしろ当たり前のこと、さらには正当なことであるとさえみなされていた。思想家たちは、それをとらえ返し、自明な事柄を理不尽な事柄として見るあらたな視点を示してきた。

本書で言及した不正は、すでに過去のものとなったわけではない。たしかに、人種差別や性差別、そして植民地主義やジェノサイドが不正であることはいわば「共通の確信」として私たちの政治文化にしだいに定着してはきている。そして、数々の負の経験から、そうした不正は繰り返されるべきではないことを学習してきてもいる。しかし、それらが現に繰り返されていること、あるい

は不正と認めながらもいまなお有効に対処できずにいる問題があることは否定できない。そのような後退がなぜ起こるのか、なぜ変えられるにもかかわらず変えることができずにいるのかも、本書で取り上げた思想家たちによって問われつづけてきた問いである。

政治哲学は、現状から距離を取ってそこに伏在している不正を看取しうる視点をどのように構築できるか、また、それとともに、これまでの確信に照らして明らかに不正とみなされる事柄をいかにして廃棄し、縮減していくことができるかを探求しつづけている。そして、何が不正とみなされるべきなのか、その不正にどのように対処すべきかについては、つねに意見が分かれ、論争が交わされている。編者としては、このような抗争をはらんだ政治哲学の探求に誘うものを本書が提供できていることを願うが、それについては、読者の皆様のご判断を待ちたいと思う。

本書が成るにあたっては、企画の段階から法律文化社の秋山泰さんに本当にお世話になった。編者の不手際にもかかわらず、最後まで快くご支援くださったことにあらためて心よりお礼を申し上げる。

2016年 春

編者 姜 尚中
齋藤純一